〔古今要覽稿 草木〕したつきすゝめうり　仙沼子　合子草

したつきは、一名すゞめうり、一名すゞめのうり、一名ひめうり、一名よめのごき、一名よめがさら、一名ごきづる、一名からすのごき、一名ひなのかうし、一名かはほうづき、一名からすのごきづる、一名よめのわん、一名きんぶんしきといひ、漢名を仙沼子、一名合子草、一名盍合子、一名聖知子、一名聖先子、一名預知子、一名救疾子、一名神變子、一名總持子、一名鹹毒仙、一名詔子といふ、此草はいづれの國にても、池沼及び溝渠のかたはらに多し、春苗を生じ蔓をなし、葉は一種の馬皎兒葉に似て長く、又頗る旋華葉に似て三尖あり、葉ごとに細鬚ありて、物をまとふ事、又馬皎兒の如し、夏に至れば、その葉の間に白花を開き後實を結ぶ、大さ棗の如し、其中に二子ありて、形龜子に似て至て小にして、又頗る縮砂の仁のごとし、その子嫩なる時は、外皮白くして中に粘汁あり、老る時はその汁凝りて仁となり、外皮黑色に變じ、曝乾すれば、又灰色或は淡褐色に變ず、その味少しく苦し、此子をとりて延喜の比には、漬物の料と延喜式せしを、又旋用多驗と本草和名いひ、又治一切風補五勞七傷其功不可備述日華本草いふ時は、たゞ食料に供せしのみにはあらず、それより降りて永曆承安の比に至りては、后宮御懷姙の時は、必ず此子二七粒を典藥頭より奉りて、御著帶の中へ入て、專ら催生の料に供せられしなり、山槐記、玉海定長卿記、それを奉るに和氣氏より奉れるは、皮を除かざれども、丹波氏より奉れるは皮を去ると醫師經長記いへり、又その數を二七粒に定められしは、まさに盍合子催生云々、又治一切病毎日取仁二七粒と日華本草みえたるによりてなり、また方言本草に、預知子難產に用ゆ、又產前に三十粒を帶に付るは、按にこゝに三十粒を帶に付るといへるは、日華本草に患者眼不過三十粒永差といひしにより也、まさに產する時に用ゆべき爲也といひ、又萬安方の六物麝香丸の方中に仙沼子あり、小兒大人腹脹氣塊を治すといへり、かく功能多き一奇藥のいと得やすきものを、今にいたりては、絶てこれを用ゆる事をしるものなきは、くち惜き事也、扨圖經本草に、預知子蔓生、依大木實作房、初